

## 一番最初

(原文)

竹田 俊顯 (15 歳)

京都府

京都学園中学校

僕にとって、やさしさとは、困っている人にみずからさしのべる手だと思います。

僕が小学校に通っていたころ、担任の先生が妊婦さんでした。当時小学校二年生だった僕は、自分なりにできることを考えて、お手伝いをしようと考えました。小学校では毎週火曜日に、フッ化物洗口がありました。フッ化物洗口が終ると、みんなはフッ化物をバケツに入れてコップを洗います。当時の僕は、そのバケツを洗うという先生の仕事を、自分がするようになりまして。担任の先生が出産休暇をとられ、三年生になっても、そのお手伝いはやめませんでした。四年生になっても毎週火曜日、僕はバケツを洗いました。途中で、「それみんなの口の細菌だらけやで」だとか、「そんなんやらんでいいのに。なんでやってんの」など他にもいろいろなことを言うてくる人がいました。しかし、そうじゃない人や、先生からは、「いつもありがとう」や、「助かるわ」など感謝の言葉をもらえるようにもなりました。五年生になると、今度は僕だけでなく、隣のクラスでも、バケツを洗うお手伝いをする人がでてくるようになりまして。そして、六年生になった時には、「今僕が洗うわ」や「今私がやる」といった声があるようになりまして。僕が約四年半ほど続けてきた当り前がみんなの当り前になったとき、僕はみんなに「ありがとう」といいました。ぼくは手伝ってくれた友達にとても感謝しました。同時にとてもうれしく思いました。そして二年生のころ担任だった先生も、そう思ってくれていたのかなと思いました。する側は最初、される側の気持ちは分からないけど、される側になったとき、していた分、僕の内で、うれしさは倍以上になって自分にかえってくることを知りました。そしてもう一つ大事なことを知りました。それは、手をさしのべて、ひっぱりつづければ、今度はそのひっぱることを手伝う人がたくさん手伝いにきてくれるということです。なんにでも勇気を出して一歩ふみ出し歩き続ければどんどんついて来てくれる人がいることが分かりました。そして今、その一歩をふみ出す人が少ないのではと思いました。しかし、そのような人を増やそうと思っても増やせないのが現実です。そこで、僕は団結すればいいと思います。なぜなら、一人で一歩をふみ出せなくても、みんなとならできるからです。そうして、たくさんの人が手をさしのべられる人になっていけば、社会はやさしさであふれると僕は思います。

これからは、高齢化が進み、僕たちが高齢者になるころには、高齢者の割合が半分をこえているかもしれせん。高齢者へのやさしさは、様々な形となって現れます。ユニバーサルデザインもその一つで

す。僕はやさしさをうけついでいく必要があります。感情は人間特有のもので、ロボットが普及しているであろう未来に、やさしさが無ければ人間は暮らしていくことができないかもしれません。

一歩をふみ出し、手をさしのべる。これを未来に伝えることができれば、今も、これからも、やさしさにあふれる社会をつくっていけると僕は思います。